



学校法人大橋学園 理事長
大橋 正行

おおはし・まさゆき氏
1948年生まれ
和光大学経済学部経済学科卒業、三重大学大学院人文社会科学部研究科修士課程修了
1974年文化女子大学入職
1975年学校法人みえ大橋学園(2017年4月名称変更予定)理事長就任
ファッション、調理製菓をはじめ、商業実務・看護・介護福祉・医療の専門学校を設置、2002年には愛知県にも活躍の場を広げ、同年学校法人大橋学園(旧:学校法人精和学園)理事長に就任
2017年ユマニテク短期大学学園長就任予定

人間性×技術で地域を支える人材を育成

大橋学園は、戦後、女性が手に職をつけて豊かに暮らしていけるようにと、洋裁学校の創立から始まりました。以来、「確かな技術」と「豊かな人間性」を大事にしながら、女性の職業教育を支えてきました。

まだ既製のない時代に、手縫いで洋服作りを教えました。団塊の世代が多かった1965年の全盛期には、1350人の生徒がいました。やがて既製服が流入することで、手縫いから大量生産の時代へと変化したため、本学も新たに分野を拡げ、1971年に調理師学校を設置しています。

私が理事長に就いたのが1975年でした。その頃は洋裁学校の経営が厳しい時期で、学生募集と就職先確保の両面で時代の変化を迎えていました。高度成長期であらゆる分野の給与水準が上がっていくなか、労働生産性の低い手縫い分野において、就職先の職場も拡大していきません。そのため入学者も激減してしまいました。そこで学生募集を懸命に行ったところ、入学希望者数は3倍に持ち直しましたが、就職先は相変わらず安定しない。この状況で学生募集を継続しても学生のためになりません。

そこで、学園の原点に戻り、人の一生の暮らしに深く関わる分野で、地域社会の様々な人材ニーズに応える専門学校を展開していこうと決めました。

地域に必要な人材領域を開拓

まず1994年に手がけたのが看護専門学校です。当時、民間の専門学校が医療系の学校を作るのは珍しかったのですが、徐々に実績を評価され、1999年には、当時ニーズが高まっていた理学療法士や作業療法士を養成する医療専門学校を設置しました。さらに1997年に福祉専門学校も作っています。

2010年に看護専門学校に助産専攻科を設置しました。県立の助産学校が閉校したことで、三重県は10万人あたりの助産師の数が全国最下位になっていま

た。この現状に危機感を抱き、産婦人科医と話したところ、「待っていた、全面協力する」との声を頂き、今では毎年10月中には定員が埋まってしまいます。定員のうち半数以上は大学を卒業した学生です。在学中に医師の力を借りず正常分娩を10例経験することを厚生労働省が義務づけているのですが、出産数が低いなか、これをクリアするのは大変です。このことから、定員30名は大きな規模だと言えます。

2017年4月ユマニテク短期大学を開学

近年、幼児保育の教員の確保がとても厳しい現状を受け、保育者の養成校を専門学校として設置するつもりで進めていました。ところが、これからは幼保一体化の動きのなかで認定こども園が増設されていくため、幼稚園教諭の資格も必要になる。専門学校では保育士の資格しか取得できないので、短大の通信制と併修しなければならず、非常に不合理だというものでした。

こうして2017年4月、三重県四日市市に「幼稚園教諭」と「保育士」のWライセンスを取得することができる幼児保育学科を持つ、ユマニテク短期大学を開学することとなりました。

ユマニテク短期大学の「ユマニテク」とは、「豊かな人間性と確かな技術」という私どもの教育理念であります。ユマニテクとは、ユマニテ×テクニクで、フランス語のユマニテ(人間性)とテクニク(技術)をあわせた造語です。人間性を育みながら、専門的な技術を身につける人材育成を目指しています。

幼児教育の現場では、慢性的に人材が不足しています。離職率の高さが理由です。子どもの教育には準備が不可欠なので、家に帰っても休む暇がないうえに、給与などの待遇が悪いことが背景にあります。

そして三重県には、隣の愛知県で保育士が足りていないという問題があります。愛知県には幼児保育系の大学、短大が多いにも拘わらず、現場では人材が不足しています。そのため、三重県の子ども達が、愛知県へ滔々と流れていってしまう。その状況は改善されてい

ません。短大ができたからといって、地元に着着してもらわないと、三重県で人材が充足できるわけではないのです。大学としては、地域との関係性を強めて、この三重県の抱える課題を少しでも解決するため、アクセスを示さないといけないと思っています。

大学化や外国人受け入れも視野に

将来的には、短大から、大学または2019年に導入予定の「職業教育に特化した新しい高等教育機関」への移行も視野に入れていきます。

今回の短大は、幼児保育学科の1学科、定員100名でスタートします。全学で200名の短期大学というのは、存立としてギリギリの規模であり、必然的に拡大していかなければいけません。今ある分野を、大学か、新しい学校種か、どちらにふさわしいかを選択していくことが、学園全体の課題にもなります。今後も、この地域で不足している様々な人材ニーズに応えていきます。

一方で、大学のない地域に住む生徒のニーズに応えるための通信制を2年後には申請したいと考えています。またこれまで、三重県と愛知県に限る狭域型の学生募集を展開していましたが、今回、中域型に大きな方針転換をしました。

さらに、これまで外国人は受け入れていませんでしたが、学園全体で10%までの受け入れを開始します。具体的には、日本語が第一外国語にもなったベトナムや、インドネシアの日本語学校に募集を行っています。今のところ、日本語学校が成立している国に限っていますが、数年以内に四日市市に日本語学校を作る予定です。日本語の力が十分についていない学生を受け入れると、入学後のフォローは必須となります。これは方針転換に伴い自動的に起こっていくことなので、語学学校や寮などの整備が必要だと考えています。そしてこれらの国で募集広報を展開することで、どの分野に人が足りなくなっているかも分かり、新しい次の学校が発生しうるだろうと予測しています。